The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Etude sur langue de Francois Rabelais : lexicographie
Author(s)	平手, 友彦
Citation	大阪大学, 1995, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/39103
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【3】

氏　　名	平手友彦（ひらてともひこ）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学位記番号	第　11933　号
学位授与年月日	平成7年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学位論文名	Etude sur langue de François Rabelais－lexicographie－ （フランソワ・ラブレーの言語研究－辞書記述法－）
論文審査委員	（主査） 教授　大高　順雄 （副査） 教授　高岡　幸一　　教授　藤田　実

論文内容の要旨

1　序論

16世紀という時代がヨーロッパの社会に大きな変化をもたらしたことはよく知られている。政治，経済，宗教，芸術等の様々な分野に大きな変革がもたらされた。言語の世界も例外ではない。古いフランス語から現代フランス語への確立の途上にあった16世紀のフランス語は，ラテン語の影響等によって流動的で，統一性を欠いていた。このような状況下で，1530年代より，徐々に文法編纂及び辞書作成が企てられるようになる。例えば，1531年にフランス人による最初のフランス文法書『フランス語入門』がジャック・デュボワ J. Dubois（ラテン名 Sylvius）によってラテン語で著され，1539年にはロベール・エチエンヌ R. Estienne が最初のフランス語辞書『仏羅辞典』を著した。1539年はヴィレ・コトレ Villers-Cotterêts の勅令によってフランス語がラテン語に代って公式な言葉になった年でもあった。そして，この16世紀中期以降，更に多くのフランス語文法・辞書編纂が企てられていくことになる。しかしそうした文法家の試みはその多様さと数の多さ故に，16世紀のフランス語に一層の混乱を招いたとも言えるだろう。また後世の私達を16世紀の作品から遠ざける一つの要因はこの言語の混乱にあり，本論文の第一の目的は，各語について文法的問題を説明し，これらを辞書形態で提示することによって16世紀の作品をより読みやすいものにしようとするものである。

フランソワ・ラブレー François Rabelais（1494？-1553？）がすさまじい語彙力を駆使して一連の巨人物語『ガルガンチュワ・パンタグリュエル物語』を生み出したのは正にこのフランス語の流動期であった。最初の物語『第二之書パンタグリュエル物語』が恐らく1531年，そして『第四之書パンタグリュエル物語』が書かれたのが1552年で，このユマニストは近代フランス語の文法論及び辞書作成の試みの時期に巨人物語を次々と綴った。そこで本論の第二の目的はこの16世紀フランス語の流動性と不統一性が，ラブレーの全作品（後述のコンコーダンスでは総語数256576語）の中で具体的にどの語にどのように現れ，どう変化していくかを，通時的に考察し，16世紀前半のフランス語の実際と変化を検証すると同時に，ラブレーのフランス語使用法の特徴とその変化を明らかにすることである。

また，このラブレーの語彙及び文法構造の研究では，多量のデータとその変化を詳細に検討する。とりわけ頻度数と異本文を詳細に検討することで，ラブレーの死後に出版され，その作であったかどうかが現在でも疑わしい『第五之書パンタグリュエル物語』（部分版及び完成版）の真偽についてM. ユション女史（M. Huchon, 1981）が既に試みた考察結果に，新たな補足的データを加えたい。

2　ラブレーの言語研究

ラブレーの言語研究には現代の言語理論などに立脚した研究もあるが，本研究は語彙・文法研究である。語彙の方面で古典的なセネアンの研究（L. Sainéan, 1922-1923）があり，現代ではバルディンガー（K. Baldinger, 1990）らが精力的に研究を進めている。他方，文法に関してはユゲ（E. Huguet, 1894）のような古い研究以外には，16世紀フランス語全体を扱ったグゲネム（G. Gougenheim, 1951）またはリカード（P. Rickard, 1968）しかなく，ラブレーの文法のみを扱ったものではない。また，このユゲの研究も同時代の作家との比較からラブレーの統語上の特徴を明らかにするという点では価値のある研究ではあるが，残念ながら研究自体が前世紀のもので，使用テクストも古く，異本文にも検討が加えられず，網羅的ではなく，所々正確さに欠ける点もある。また，先に挙げたユションの詳細な研究は方法の上で本論と類似し，部分的には重なる所はあるが，主にラブレーの全作品に綴り字と句読法に一つの原則性を読み取り，『第五之書』及び小品の真ぴょう性を探ったもので，本論のように文法全般を扱ったものではない。

3　対象と方法

まず第一に，ラブレーの書誌に関する研究を利用して，ラブレーの作品の現存するすべての版（約100の版本）の中から，ラブレーが何らかの形で出版に参加していたと思われる版を推定する。私達はユションの研究及びスクリーチとロールズのラブレー書誌（S. Rawles & M. A. Screech, 1987）等を参考にして，合計24版を特定した。しかし本研究ではこれら全ての版を対象とすることは出来ない。ラブレーの近代批評版全集が未だ存在しない現状では，全ての版を参照して辞書を作成すれば，原典を参照することが辞書の利用者にとって困難となり，辞書としての機能を果たさなくなる。他方，手軽な全集本を基本テクストにすると，異本文が表記されておらずラブレーの語彙使用及び文法特徴の変化をたどることが不可能で，科学的ではなくなる。そこで今回の研究では比較的手に入りやすく或る程度まで異本文が表記されたT. L. F. 版を使用する。この版では，先の24版の内16版を扱うことが出来る。

第二に，ラブレーの文法及び16世紀フランス語に関する主要な研究（Huguet, Gougenheim, 等）を参考にして現代フランス語とは異なる用例を中心に検討項目のデータベースを作る。総語数256576語（後述のコンコーダンスによる集計）で構成されたラブレーの作品群から分析・検討された項目は，文法事項として35項目，単語としては424項目で，総計459項目が対象となった。本研究の辞書の第一部にあたる主な単語項目をまとめると以下のようになる。

形態

名詞	女性名詞の形成
	複数形から作り直された単数形
	特殊な複数形
代名詞	古形代名詞　cestuy, cil 等
形容詞	女性形から作り直された男性形
副詞	-ment で終わる副詞の形成
動詞	-ir と -er, -nir と -nistre で終わる動詞
	直説法及び接続法の活用
	過去分詞の形態

統辞

名詞	現在とは異なる性の扱いを受けた名詞
形容詞	副詞的用法 blanc, correct, franc, sain, net, petit 等
	形容詞句の使用
副詞	否定の副詞 goutte, grain, mie 等
	副詞句
前置詞	様々な前置詞 attendu, devers, ensemble 等
冠詞	抽象名詞と冠詞 paix, raison の冠詞の省略
動詞	非人称動詞の使用
	他動詞性と自動詞性
	代名動詞

作り直された男性形

法　　接続詞（句）の後の法 comme si 等

成句の後の法 avoir paour que 等

その他

また，第二部の文法事項の項目についての頻度数は，物理上等の制約があり，表記できたものは限られている。

第三に，これら459の検討項目の用例をディクソンとドーソンによるコンコーダンス（J. E. G. Dixon et J. L. Dawson, 1992）より全て抽出する。しかしこのコンコーダンスには元来ヴァリアントのないテクストを使用したこともあって，異本文が表示されていない。16世紀の作家研究では，その作品（の中の語彙及び語形）の“変化”を含めて考察することを忘れてはならないが，とりわけラブレーのような作家には，この“変化”にこそ重要な意味が隠されていることが少なくない。そこで，本研究では，このコンコーダンスから抽出した用例を上記の T. L. F. 版で確認し，その“変化”も表記した。

第四に，各作品における頻度数を出して，各項目ごとに16世紀フランス語の一般的特徴と比較しつつ通時的に分析する。

4　分析

可能な分析結果は各々の見出し語のなかに記述されているが，ここで，具体例として三例ほど分析結果をまとめる。

a．名詞の性の用例分析

16世紀では現代と異なる性の扱いを受けていた名詞が少なくない。これらの名詞をラブレーの全作品に網羅的に調査したところ，以下のように54の名詞が発見された。

	男性	女性	両性	総計
有生名詞	1	1	3	5
無生名詞	18	8	23	49
総　計	19	9	26	54

この性の変化の原因は，無生名詞において，男性名詞扱のものは語源からの影響，女性名詞扱のものは語尾形態からの影響が強いことが確認された。また，意味の類推による性の変化もみられ。更にこの性の変化を意図的に使用して文体的効果を狙った可能性も示唆する事が出来た。(aage, amour, œuvre, teneur)

b．動詞の自動詞・他動詞性

動詞が不定法を目的語に取る場合，現在ではこの不定法の直前で前置詞が置かれる事が多い。(例えば，commencer à等) ラブレーの作品中で26の動詞について調査した結果，後期の作品『第三之書パンタグリュエル物語』,『第四之書パンタグリュエル物語』に前置詞なしの用例が多く見られた。とりわけ，『第四之書パンタグリュエル物語』では前置詞を伴う現在のフランス語的な用例が一つも見られない。これはラテン語風の前置詞を伴わない用例を使用することでラブレーは文体を故意に古めかしくしているのではないかと考えることが出来る。また，ラブレーは commencer, donner, entreprendre, espérer といった動詞では『第一之書パンタグリュエル物語』の異本文で前置詞有りの用法から無しの用法に変えている。これもやはりこの異本文の持つ版（François Juste 版）を古めかしくするために行なったものと言えるだろう。

c．単語見出し項目を中心に頻度数に注目して『第五之書』の異質性とラブレーの関与の可能性を指摘する。『第五之書』にのみ現れた語彙及び用法は，26例あった。例えば，直説法を伴う combienque，副詞 lëans，動詞 pondre，序数詞 sexte の使用，canals, caporalz, yeux 等の複数形は『第五之書』だけに特徴的に見られるが，この程度の数の特殊性は各々の物語に既に見られる。従って，必ずしも『第五之書』がラブレーの手によるものではないと即断は出来ない。むしろこの少なさは『第五之書』へのラブレー関与を支持する結果に終わってはいないだろうか。ここでは今回発見した新たなデータをユションの分析結果に加えて置くことで満足しなければならない。

5　結論

一人の作家に関しての文法辞典，それも異本文と頻度数が記述された文法辞典を作成する試みはあまりなされていない。しかしこの辞典によって私達は或る程度までラブレーの語彙及び文法特徴と変化を探る事が出来た。またこのような各々の語の異本文及び頻度等を利用した詳細な分析は，ラブレーの巨大な言葉の森に新たな光を投げかけ，恐

らくは未だに顧みられていない語句の中に大きな問題が横たわっている事を教えてくれるかも知れない。しかし，いずれにしてもこの『ラブレー文法辞典』にはこの巨人の作品の生成を明らかにする出発点に過ぎない。今後もラブレーの「変化」に注目して詳細な分析を試みて行きたい。

論文審査の結果の要旨

本論文は16世紀フランスの作家François Rabelais（1494？-1553？）の特徴的語彙の研究を「語記論」lexicographieの立場からまとめたものである。

古フランス語から現代フランス語への確立の途上にあった16世紀のフランス語は，1530年代より徐々に文法編纂及び辞書作成が企てられるようになった。例えば，1531年にフランス人による最初のフランス文法書『フランス語入門』がJ. Duboisによってラテン語で著され，1539年にはR. Estienneが最初のフランス語辞書『仏羅辞典』を著した。また1539年はVillers-Cotterêtsの勅令によってフランス語がラテン語に代わって公式な言葉になった年でもあった。そして，この16世紀中期以降，更に多くのフランス語文法・辞書編纂が企てられていくことになる。Rabelaisが一連の巨人物語『ガルガンチュワ・パンタグリュエル物語』を生み出したのは正にこのフランス語の流動期である。最初の物語『第二之書パンタグリュエル物語』が恐らく1531年に書かれ，そして『第五之書パンタグリュエル物語』が出版されたのが1564年である。本論文はこの16世紀フランス語の流動性と不統一性が，Rabelaisの全作品の中で具体的にどの語にどのように現れ，どう変化していくかを，通時的に考察し，16世紀前半のフランス語の実際と変化を検証すると同時にRabelaisのフランス語使用法の特徴とその変化を明らかにしたものである。

この作家の語彙は，これまで総合的な立場から研究されたことはなく，また『16世紀フランス語辞典』Dictionnaire de la langue française du seizième siècleは各語の意味を明示していない。本論文はこれまでの研究成果を十分に消化吸収し，最近の研究成果の上に立って独自の展望をもって行った語彙研究である。

本論文では，Rabelais全作品に現れた総語数256，576語-J. E. G. Dixon & J. L. Dawson, Concordance des œuvres de Rabelais, Genève, 1992による- から424語を選び，従来の古典的研究に基づくRabelais独自の「文法事項」35項目を加え，本邦初の総合的研究となっている。その際，使用された刊本も最近の研究成果による定本に限定し，異本文も吟味の対象にするという綿密な研究方法に則っている。

まず第一に，Rabelaisの書誌に関する研究を利用して，Rabelaisの作品の現存するすべての刊本（1564年までで60の刊本）の中から，Rabelaisが何らかの形で出版に参加していたと思われる版を推定している。

第二に，Rabelaisの文法及び16世紀フランス語に関する主要な研究（Huguet, Gougenheim, 等）を参考にして現代フランス語とは異なる用例を中心に検討項目のデータベースを作成。

第三に，これら459（語彙424語と文法項目35項目）の検討項目の用例を上記Concordanceより全て抽出している。しかし，このConcordanceには異本文が表示されていない。16世紀の作家研究では，その作品（の中の語彙及び語形）の「変化」にこそ重要な意味が隠されていることが少なくない。そこで，本研究では，このConcordanceから抽出した用例の「変化」，即ち異本文も表記した。

第四に，各語について，各作品における頻度数を出すことによってその使用変化を明らかにした。また，Rabelais独自の用法を付記し，特有な意味を与え，必要な場合には同時代の他の作家の実例を引用して比較検討を加えている。また，各文法事項について，16世紀独特な現象とRabelais独特な言い回しを区別し，さらにはラテン語法に由来を求め，実証的語彙記述法を確立している。本邦において，この「語記論」は特に16世紀フランス語という流動的性格を持つ言語を辞典の形にまとめる点で成功した初例である。

しかしながらいくつかの問題が残されていないわけではない。収められた語彙は真にRabelaisの言語体系の主要な要素を成しているかどうか，また，彼の作品の特質を顕示する語を網羅しているかどうか，文法事項はRabelaisのみに該当し他の作家には無関係であるのかどうか，といった諸点が実証されないままである。

しかし全体として言えば，本論文はRabelaisの言語の研究を初めて辞書の形態にまとめ上げたという点で，今後の研究の基礎となる優れた研究である。本論文が学位請求論文として十分に価値のあることを認定するものである。